聖書と歴史の旅

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　佐々木　和宏

　還暦を過ぎ、数年が過ぎた。これまで、人生を何度も振り返り、なんとか生きてきた。楽しいことなど記憶には残らず、苦しい事や辛い事。後悔ばかりが蓄積される。幼少のころからずっと続く孤独というものが、そうさせるのかもしれない。そんな時間を何十年も過ごしてきた。

　人生の後半に出会った妻は、クリスチャンだった。あることをきっかけに教会から離れていた。教会に行きたい気持ちを口には出さないで、病と闘いながら、ただただ質素にいきていた。

　今年の春、喫茶店でモーニングを食べながら、教会を外側からだけでも覗いてみないかと、妻を誘った。行かなくてもいいとは言っていたけれど、気軽に礼拝も覗いてみようよと、半分強引に連れて行った。

　その日は丁度、イースター礼拝のある日曜日だった。二人は礼拝堂の一番後ろにある長椅子にちょこんと座り、その場の空気を感じながら、牧師の言葉に耳を傾けた。私は初めて礼拝というものを経験していたけれど、妻は、静かに涙を浮かべながら、感慨に浸っていた。まるで、ようやく帰る場所を得たようにも見えた。

　その後、牧師の計らいで聖書の学びの機会を与えられるようになった。私たちにとってはありがたい話である。妻は幼少のころからキリストの教えや聖書に触れていたので、記憶を呼び起こすことで学びに応じていけるのだろうけれど、私はまったく白紙状態。さて、何からどうしようかと考えて、キリスト教の歴史を横に置いて、聖書に示されている教えや教訓をたどろうと考えた。

　教会の学びの場を数回経験してみると、キリスト教や聖書に対するイメージが変わってきた。いや、自分の中にあった認識とは違ったものだった。仏教などでは、本尊に祈り、すがり、見返りを求めるものと思う。しかし、キリスト教や聖書は、自分を支え、自分を変化させる、というきっかけを与え続けてくれる。自分を励まし続けてくれるという認識に変わってきた。今の自分は、学びは浅く、聖書の示す奥深いところには、まだまだ達することはできない。もしかしたら、そうやって学び続けることが一生というものなのかもしれない。

　何千年という時の流れの中で、人々に読まれ続けてきた聖書。私にとっては戒めや慰め、心を休める場所となり、また、生きていこうと思わせてくれる。その聖書やキリスト教の歴史を知ることは、聖書への理解を深めると感じるし、人とはなんなのだろうと考えさせてもくれる。歴史の旅を彷徨いながら聖書を開くとき、自分の中に聖書の教えが浸み込んでくる気がしている。聖書の旅は、今という時代を妻と二人で生きる旅でもある。賛美しながら、笑顔を忘れない旅としたい。

２０２４年７月１７日